

2026(令和8)年度 入学試験問題

総合型選抜

地域創生学群 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は12時30分から13時30分まで(60分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に2ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
6. 受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。このような解答があった場合には採点されないことがあります。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章を読み、筆者の主張について批判的観点から 400 字以内で論じなさい。

「マイパブリック」とは造語で、“自分で作る公共”のことである。よく、公共空間のよい活用のされ方として、欧米の事例が挙げられるが、そもそもそういった国や地域では、公共空間を管轄する行政が意識の高い民意をすくいとり、柔軟に対応する、成熟された関係ができていることを無視してはならない。行政と市民のそんな関係が、今の日本にはあるだろうか、これからの日本に期待できるだろうか。わたしはそうは思っていない。かといって、悲観もしていない。日本には日本のやり方があるはずだ。

(中略)

自分の時間やおかね、労力を使って、周囲のひとにひらかれた場をつくるということは、一昔前なら、異常に気前のいいひと、もしくはただの奇人だと思われただろう。しかし今なら、そしてこれからなら、違った捉え方をされる気がする。何でもかんでも、占有すればするほどしあわせになれるのではないかと信じられてきた世紀を超えて、コワーキングスペースやシェアハウスといった、共有するシステム、共感する価値観は、若い世代を中心に根付いてきており、この時流がそう簡単に覆るとは思えない。

ところが、いわゆる既存の公共施設、公共空間、公共的インフラの現況はどうだろう。(中略)「まちづくり」という定義の曖昧な言葉が横行するなかで、公共的であるはずの「まち」とわたしたちとの関係は、どんどん希薄になってしまっているのではないだろうか。わたしたちに公共、また公共的であると感じられる場、そんなまちを取り戻すためには、誰が何を換えればよいだろう。何から手を付けたらよいのだろう。

路頭に迷うことはない。そもそも行政と市民の関係が成熟していない日本だからこそ、あればいいなと思う公共は、自分で勝手に作ればいいのだ。馬鹿げた考えに聞こえるかも知れない。けれど、わたしは自分で自家製公共づくりを実践して、また他のひとがつくる公共に触れて、これまで公共というものを一手に担うかのように思われていた行政がつくるそれより、

自前で作るもののほうがはるかに軽やかで柔軟で、そして今すぐにでもできるものであることを、思い知った。

(中略)

わたしがなぜ、こうして公共づくりを他人に勧めるのかというと、もちろん楽しいからである。いい音楽を聴いて、思わず誰かに勧めたくなる。それと全く同じ心境だ。そしてまた音楽と同じで、いくら聴かされても全くよいと思えない場合もあるだろうし、逆に、勧められた側のほうがめり込むことだって、あるだろう。(中略) 音楽だって、プレイヤーとリスナーがいる一方、そのどちらにも属さないひともある。別の音楽には、別のファンがついている。マイパブリックも同じで、いろんなひとが、いろんな毛色の公共をつくれば、そのぶん多様になるし、そのぶん、ひとは自分にフィットする公共に出会いやすくなったり、好きな公共を選べるようになったりする。

公共が「みんなのもの」ひとつしかないことが、そもそも問題だったのではないだろうか。「みんなのもの」と自称してしまうから、クレームの苦情ひとつに過敏になって、それまで愛すべき豊かななみを次々ととりやめて、個性もなにもない、つまらないものに落ち着く方向になってしまったのではないだろうか。

個人が作る私設公共＝マイパブリックは、「みんなのもの」という責を負わない。作り手本人がよかれと思うものを、やれる範囲でやる。それをフィーリングの合うひとが使う。そうでないひとは別のマイパブリックを使ったり、あるいは自分でつくったりする。そんな在り方だって、あるのではないだろうか。それしかないし、それでいいのではないだろうか。

(田中元子『マイパブリックとグランドレベル——今日からはじめるまちづくり』による。ただし出題に際して原文の一部を改めた。)